



怪盗Rさんと
イタリアンジェ
ニート



ガブリエル

今日も、怪盗R一味はイタリア観光中です

今日は、女性達を中心になって
ショッピングをしているみたいです

「Rさん、沢山買いましたね
でも、日本で買うより安いのでお得ですよ
だから、つつい買ってしまおうんですよ
しかし、ずっと歩きっぱなしで疲れましたね
Rさん、ジェラートでも食べながら休憩しましょうよ」

「ジェラート！
良いわね
ちょうど、この先にジェラテリアがあるから行きましょう」

「わあ～！
色んな種類があって悩めますね
Rさん
ここは、わたしがお金を出しますから、
好きなジェラートを選んでくださいね
他のみんなも遠慮しないで選んで！」

「じゃあ
わたしはオレンジ」

「僕は、チョコレート」

「わたしは、ピスタチオにしよ～っと
Rさんは何にします？
何でも美味しそうですよ」

「それじゃあ

この、シチリアレモン味にしよ〜っと
おじさん、これちょうだい」

「あ〜っ
ごめんね
シチリアレモン味が売り切れてしまったんだよ」

「え〜っ！
そんなあ〜」

「残念でしたねRさん
でも、他の味も美味しそうですよ」

「嫌よ！
わたしはシチリアレモン味が食べたいの どうにかならないの？」

「そんな事言われてもなあ〜
そうだ！
シチリアレモンを持って来てくれたら
レモン味のジェラートを作ってあげるよ」

「ほんと、おじさん！ それじゃ、シチリアレモンを探しに行くわ
よ〜！」

「って！ 何処に行くんですか？ Rさん シチリアなんて行けませんよ！
」

「確かに、そうよね でも、私はどうしてもシチリアレモンが食べたいの！」

「ちょっと、お嬢さんがた シチリアまで行かなくても お店で仕入れている所に行って持って来てくれればいから」

「なあ～んだ そういう事か！ だったら、簡単じゃない 早速行きましよう！」

Rさん達は、ジェラテリアが仕入れを行なっている お店にやってきました

「ココが、仕入れをしているCantare商店ってお店ね」

「すみません シチリアレモンが欲しいんですけど？」

「ハイ、ハイ シチリアレモンね あれっ？ あれっ？ 無いなあ～ ここにあったはずだけどなあ～ あれっ？ お～い シチリアレモンって何処にやったかなあ～」

「店長！ シチリアレモンは、在庫切れって言ったじゃないですか！」

「あれっ？ そうだっけ？ あれっ？ おかしいなあ～ ゴメンね シチリアレモンは無いみたい」

「え～っ！ それじゃ、シチリアレモンって手に入らないの～」

「今度の入荷は、来週になっちゃうから ちょっと、無理だね」

「どうしますRさん？ もう、諦めましょうよ！」

「嫌よ どうしても食べたいの！ でも、さっきからレモンの香りがするけど この香りは何処から匂ってくるのかしら？」

「あっ！ Rさん、 あそこにレモンをくわえた猫ちゃんがありますよ」

「ほんと、みんなあの猫ちゃんの後をつけるのよ もしかすると、レモンが見つかるかもしれないわよ」

「あっ猫ちゃんを追いかける前にぼく、ここのおじさんに聞きたい事があるんですけど」

「なんだい？」

「ここのお店の名前って Cantare 商店っていうんですよね」

「そうだよ カンターレ商店って名前だけど何か？」

「店長さんの 勘太さんがいつも、あれっ？って言っているから 勘太あれっ？商店なんですか？」

「ガブ！何を言っているの！Cantare カンターレって、イタリア語で歌うって意味なのよ！」

「そうなんですか おじさんごめんなさい」

「馬鹿な事言っていないで猫ちゃんの後を付いていくわよ」

Rさん一味が猫の後を追いかけて行くと小さな小道に入って行きました

その先には、なんと、レモンが沢山なっているレモンの木を発見しました

「Rさん！見つけましたよでも、これだと、ローマにはえている、普通のレモンですよね ちょっと、そこのおばさんに話を聞いてみますね」

「ああそのレモンの木は、間違いなくシチリアのレモンの木だよここに住んでいるおじいさんがシチリアの生まれでわざわざ、シチリアから取り寄せて植えたそうだよ」

「Rさんこれで、ジェラートが食べれますよ早速、レモンをください」

て行きましょう！」

「まだダメよ 怪盗Rは、必ず予告状を出してから盗むのよ」

「え～っ そんな事言っている暇ないですよ ここは、日本じゃなくてイタリアなんですよ それじゃ、今から予告状じゃなくてお家の人に盗みますって言って来ますね それだと、無断で盗んだ事にはなりませんよね」

「それならいいかもね 早速、ここの家の人に予告しましょう！」

「ごめんください 怪盗R一味です！」

「は～い 何ですか？」

「表にはえているレモンを貰って行きたいんですが？」

「ああ レモンね どんどん持って行ってくださいな」

「えっ？ 持って行っていいんですか？」

「もちろん、良いですよ おじいさんと私の2人暮らしですからね そんなに沢山は食べれないんですよ それに、もう時期も終りに近づいていて、そのままほっておいても腐るだけですからね」

「じゃあ Rさん、お言葉に甘えてもらって行きましょうよ あれっ？ そういえば、猫ちゃんは何処に行っちゃったんですかね？ あばあさんの家に猫ちゃんがいるんですか？」

「猫？ うちの猫は飼ってないけどねえ～」

「いったい、あの猫ちゃんは何だったんでしょうね？」

「きっと、レモンが無くて困っているって話を聞いて僕達を助けてくれたのかもね」

「凄く、頭の良い猫ちゃんだったのね 感謝しないとイケませんね」

「そうね その猫ちゃんのおかげでレモンを手に入れたもんね さあ、猫ちゃんに感謝しながら、ジェラテリアに戻るわよ」

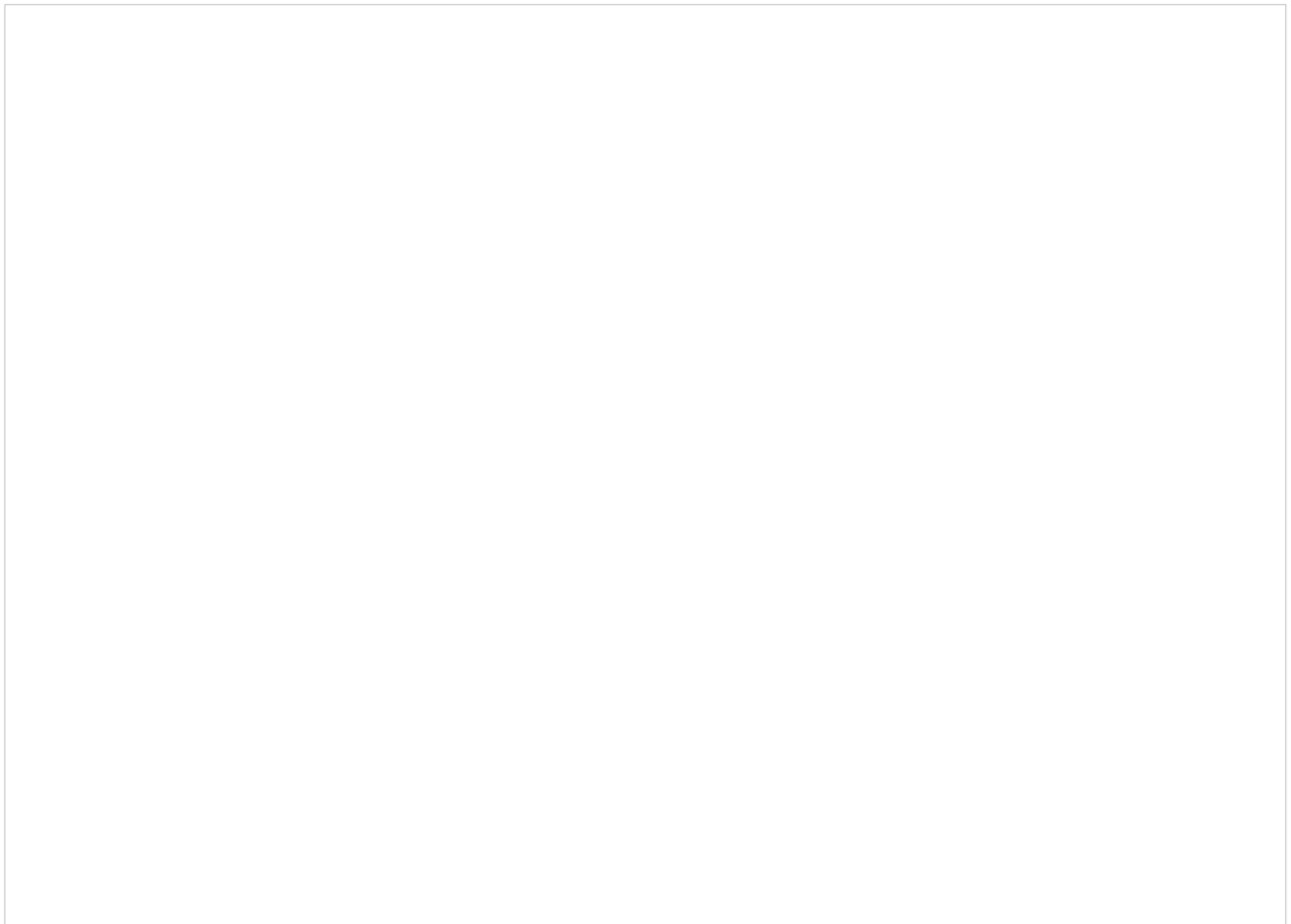


無事にシチリアレモンを手に入れた Rさんは、ジェラテリアに戻り、シチリアレモンのジェラートを無事に作ってもらう事が出来ました

「さあ、出来たよ これが、この店自慢のシチリアレモン味だよ 今回は、わざわざ取って来てくれたから、お店からサービスしちゃうからね 他の人たちもドンドン食べてね」

「良かったですね Rさん せっかく、イタリアでジェラートだから、スペイン広場で食べましょうよ」

「いいわね みんなで、スペイン広場で食べましょう！」



みんなでスペイン広場に行って ジェラートを食べる怪盗Rさん一味でした

しかし、捕まえ隊が大きな声を上げながらやってきました

「こら～！ 怪盗R一味！」

「何？ 今回は、私たち、なんにも悪い事してないじゃないむしろ、お店の為に良い事をしたのに」

「こら～！ スペイン広場での飲食は禁止だぞ～！」

「あ～っ そういう事か～ よ～し、みんな逃げるわよ～」

「は～～い！」

おわり